

令和四年度入学試験問題（前期日程）

国語

（中等教育教員養成課程 国語専攻）

注意事項

- 1 解答はすべて別紙解答紙の指定の箇所に記入すること。
- 2 解答紙には、必ず受験番号を記入すること。

解答するにあたっては、次のことに注意せよ。

- ア 送り仮名・仮名遣い・文字・記号の表記については、標準的慣用表記によること。
- イ 句読点は一字に数える。
- ウ 楷書で書くこと。

【二】 次のそれぞれの問題に答えよ。

問一 傍線部のカタカナの部分は漢字で、漢字の部分は読みをひらがなで記せ。

- ① 才能をハツキする。
- ② 先哲のガンチクあることば。
- ③ カンショウ的な気持ち。
- ④ 医学にコウケンする。
- ⑤ 国の法律にウトイ。
- ⑥ 光をサエギる。
- ⑦ その意見はゼニンできない。
- ⑧ 物議を醸す。
- ⑨ 軽く会積をした。
- ⑩ 疲労困憊した。

問二 次の語句の意味として、最も適切なものを選択肢から一つずつ選び、記号で答えよ。

- ① 慚愧(ざんき)
- ② 進捗(しんちよく)
- ③ 遜色(そんしよく)
- ④ 奢侈(しゃし)
- ⑤ 鶴首(かくしゅ)
- ア しばらくの間
- イ 度を超えた贅沢ぜいざく
- ウ 見劣りすること
- エ 心から恥じること
- オ 差し迫ること
- カ 結局のところ
- キ 勇ましいこと
- ク 物事がはかどること
- ケ 意見を求めること
- コ 待ちわびること

問三 次の慣用句には、それぞれ漢字の間違いが一字ある。訂正した正しい漢字一字を記せ。

- ① 気に介さない      ② 障子に耳あり      ③ そうは問屋が許さない

問四 次の①～③に入る四字熟語として最も適切なものを、選択肢から一つずつ選び、記号で答えよ。

・「ローマは一日にして成らず」というように、何事も（①）にはできない。

・誰も賛同者がいない中で、あれは（②）の大勝負だった。

・あの人が加わるのなら、（③）の戦力になりますね。

- ア 乾坤一擲      イ 千載一遇      ウ 心機一転      エ 一日千秋      オ 一朝一夕      カ 一騎当千

問五 和歌「頼め来（ア）言の葉ばかりとどめ置きて浅茅が露と消えなましかば」について、次の問いに答えよ。

①（ア）に当てはまるように、過去の助動詞「き」を活用させ、ひらがなで記せ。

② 傍線部「消えなましかば」の後に省略されていると想定される語句として最も適切なものを、選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

- ア よかるらむ      イ よからまし      ウ よかるべし      エ よかるめり      オ よかるまじ

問六 「岩鼻やここにも一人月の客」の俳諧に関して、次の①と②に入る最も適切な語を選択肢から選び、記号で答えよ。

この俳諧の（①）は「月」である。また、月と言え、一年の中で「中秋の名月」が有名だが、これは、（②）の夜の月を指している。

- ア 歌枕      イ 枕詞      ウ 季語      エ 縁語

- オ 陰暦七月十五日      カ 陰暦八月十五日      キ 陰暦九月十五日      ク 陰暦十月十五日

問七 次の①～⑤の各問いに答えよ。

① 東歌や防人歌が収められている和歌集を次の選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア 拾遺和歌集      イ 千載集      ウ 万葉集      エ 後撰和歌集      オ 山家集      カ 古今和歌集

② 『源氏物語』以後に成立した物語を次の選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア 堤中納言物語      イ 伊勢物語      ウ 竹取物語      エ 大和物語      オ 落窪物語      カ 平中物語

③ 『曾根崎心中』の作者を次の選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア 十返舎一九      イ 本居宣長      ウ 恋川春町      エ 近松門左衛門      オ 平賀源内      カ 井原西鶴

④ 俳句「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」の作者を次の選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア 北原白秋      イ 高浜虚子      ウ 種田山頭火      エ 山口誓子      オ 正岡子規      カ 水原秋桜子

⑤ 夏目漱石の作品を次の選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア 浮雲      イ 芋粥      ウ 斜陽      エ 舞姫      オ 潮騒      カ 三四郎

〔二〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

江戸時代の人々が持っていた一つの体系的な健康観が養生思想である。瀧澤利行（注1）によると、養生思想はもともと中国戦国時代に派生した、無病長寿を目的とする思想であり、「身体的および精神的な安定を図り、自然の法則に則った自由で自律的な生活を理想とする人間哲学の原理」とされる。そして彼は、九八四（永観二）年に著された丹波康頼撰『医心方』がわが国における現存最古の養生論だと指摘しており、わが国において養生思想が発展したのは、中国医学の影響を受けるようになった平安時代以降だといえる。その後、養生思想は儒教的色彩を帯びるようになり、江戸時代には貝原益軒や杉田玄白など多くの人が養生法を著すようになった。

『養生訓』にまとめられた益軒の養生法は、その中で最もよく知られたものである。益軒は一七一四（正徳四）年に八四歳で他界したが、彼がこの書を著したのは亡くなる前年、八三歳の時であった。当時としてはきわめて長寿といえる彼が、人々に長寿の指針を与えるために自らの経験に基づいて具体的な生活態度を述べたのが『養生訓』であり、そこには①近代とは異質な健康観が示されている。

人間の身体は天地・父母の恵みを受けて生まれ、養われたものであるから、その恩に報いるためには自らも慎んでよく養い、天寿を長く保つべきであるというのが益軒の養生思想の基盤である。自分の身体は自分だけのものではなく、天地・父母から与えられたものであり、しっかりと自己管理をして天寿を全うすることが人間の務めであるという。そのために彼は、自分の身体を損なう内欲（飲食欲、好色欲、睡眠欲、おしゃべり欲と、喜・怒・憂・思・悲・恐・驚の七情）をこらえて少なくし、外邪（風・寒・暑・湿）を恐れて防ぐことが肝心であり、それが養生の術であるという。日常生活のあらゆる場面において内欲を我慢し外邪を防げば、健康を損なわず天寿を保つことができると考えるのである。そして彼は、すべての人間の生まれつきの天寿は長いものであるが、養生しなければ短命となり、養生をよくすれば長命となると説いている。

内欲を我慢し外邪を防ぐために、彼は「畏」を強調する。「畏れるということは、身を守る心の法である。すべてに注意して気ままにしないで、過失のないようにし、たえず天道を畏れ敬まい、慎んでしたが、人間の欲望を畏れ慎んで我慢することである」と述べている。欲望にまかせて気ままに生活するのではなく、その欲望を畏れ、欲望を慎むことが大切であると説いている。そして慎むための要点が、「消耗と停滞」であるという。過ぎることが消耗であり、逆に少なすぎることが停滞となる。何ごとにも多からず少なからず、ほどほどに生活することが養生法の基本である。この点について益軒は、「自分の身体を過保護にしてはいけない。おいしいものを食べすぎ、美酒を飲みすぎ、色を好み、身体をいたわりすぎて、怠けて横になることがかりを好むのは、すべて自分の身体をかわいがりすぎることであって、かえって身体の害になる」と述べている。(中略：引用者)

欲望を抑え、慎みを持って生活するための指針を細かく著している『養生訓』は、病気の治療法ではなく、予防法を示した書である。益軒は「養生の根本は、発病する前に予防すること」であると考え、予防のために生活のあらゆる面において過度になることを戒め、中庸であることをすすめている。

このように益軒が説いている養生法は、自分の生を与えてくれた天地・父母の恩に報いるという儒教的な道徳論と、長寿のための生活方法論を骨子としている。そこに現れている健康観の特徴は、生まれながらの自然な生の状態を健康な状態と考えていることである。

天地・父母から与えられた身体は病気もせず元気で生活ができ、天寿を全うできる状態にあり、それを健康な状態ととらえている。それは「所与としての健康」といえる。そして、所与としての健康を乱さないことが大切であると考え、それをいかに乱すことなく保ち続けるかに関心を向けることになる。所与としての健康を養い、それを維持することが養生法の主眼なのである。

健康を維持することに主眼を置いた前近代の健康観に対して、近代から現代にかけての健康観は、Aを基盤とする考え方に立っている。その健康観を代表するのが、一九四六(昭和二一)年にWHOが出した健康の定義であり、そこでは「健康とは身体的、精神的、社会的に良好な状態であり、それは単に疾病がない、虚弱でないというだけではない」とされている。この定義

に示された健康観には二つの特徴がある。

第一の特徴は、②消去法的思考様式である。この定義に基づいて健康を求めようとする時、良好な状態とは何かがまず問題となる。そして何が良好な状態かを考えていくと、人はその答えを見出せないことにとまどいを感じる。そのとまどいは、「正常という典型はなく、(中略) 典型は異常の方にしかない」(なだいなだの著書による：引用者注) ことから生じてくる。正常を規定しようとする時、正常だけを追い求めても、その典型にたどり着くことはできない。典型を持つているのはむしろ異常の方であり、異常とは何かという問題に対しては、個別・具体的にさまざまな典型を明らかにすることによって答えを見つけることができる。したがって、正常を浮かび上がらせるためには、その反対概念である異常を規定し、異常がないことが正常であると考えざるを得ない。良好も同じであり、健康を良好な状態と規定すると、健康とは異常がない状態となる。

この健康観に立つと、健康それ自体は自立したものではなく、異常があってはじめて健康があることになる。つまり、異常が主で健康が従であり、③異常の影として健康が存在することになる。そして、その健康を求めようとする時、異常を消去することが焦点となる。異常の消去こそ健康を求める道であり、一次的に求めるものは消去すべき異常であり、本来求めるべき健康は二次的なものになる。

消去法的思考と関連して、WHOの健康観の第二の特徴は無限性である。この健康観が目指そうとするのは現在の異常の消去にとどまらない。それを示しているのが、定義の後段にある「(健康は) 単に疾病がない、虚弱でないというだけではない」という規定である。二重否定のこの規定は、健康とは単に病気や虚弱という異常を消去した状態ではないことを示している。そこには、すべてに異常がない状態が健康であり、それを目指して、病気にならないための努力、強健な身体を作るための努力を続けなければならないという考え方が含まれている。

すべてに異常がない状態に近づくためには、目の前にある異常を消去するだけでなく、隠れている異常を探し出して消去しなければならぬ。そのために、異常の消去に先立って、異常の探索が焦点となってくる。しかし、異常を探し出そうとすると、異常は微細化し、次々と新しい異常が現れてくる。そして異常の探索・消去は、ついには無限追求の世界に入り込んでしまう(図1)。

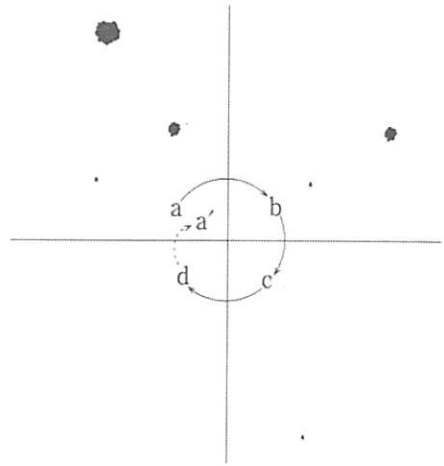


図1 異常の無限的消去

すべてに異常がない状態とは一点の汚れもない真っ白な状態であるが、それを求めようとすると、まず大きな黒が異常な汚れとなって浮かんで来て、それを消去しなければならない（a）。その大きな黒を消去すると、次に大きな黒が浮かんでくる（b）。そしてその黒を消去すると、次には小さな黒が浮かんでくる（c）。さらにその小さな黒を消去してしまうと、キャンパス全体は一見白色に見えてくる（d）。この状態が「疾病がない、虚弱でない」状態といえる。しかし、健康な状態は「単に疾病がない、虚弱でないというだけではない」のである。このことは、なお完全に真っ白な状態を目指そうとすることを意味している。それを目指すと、dの中に将来黒い点になるかもしれない灰色の因子が潜んでいることになり、その因子が黒に変異する前にそれを取り去ってしまわなければならない。指すと、aに移行する。この移行によって、真っ白な状態を目指して黒い汚れを消去しようとする運動は a→b→c→d→aへと無限の循環運動を続けることになる。

中川米造（注2）は、人々にがんのイメージを色でたずねたところ「八、九割が『黒』と答える。残りのほとんどは『灰色』と答えた」と述べている。健康を目指す社会に生きる人々は、病気や異常を黒や灰色と認識するのであり、それは汚れを黒と認識する意識と同じといえる。そして、近代の健康観にはキャンパスの黒い汚れを消して白くするだけでなく、限りなく真っ白に近い白を求めて汚れを探し出し、それを消し去ろうとする運動が内包されている。アメリカにおいて一九世紀半ばから始まった清潔を求める運動も、『白より白く』という目標を掲げていた。汚れのみえない白は健康で清潔な社会を象徴する色といえるが、白より白い白を求めようとすると、無限追求の迷路に入り込むことになる。

このように、健康を「単に疾病がない、虚弱でないというだけではない」と規定することによって、健康は異常がない状態を表す概念にとどまらず、どこまでも異常の消去を推し進めようとする目標を示す概念となる。このことは、健康が単に天地・父母か



ら与えられた「所与としての健康」ではなく、「無限追求目標としての健康」になったことを意味している。健康は生まれつき持っている状態ではなく、またどこかにある状態でもなく、たえず求め続ける状態となった。その考え方は近代の健康観に現れたものであり、近代社会は「もつと健康に」をスローガンにしてたえず前進することになる。病気を克服して健康になろう、そして健康になればもつと健康になろうという **A** こそ、近代社会の健康追求運動の基盤なのである。

この運動が病気の治療にとどまらず、**ロ** 予防の重要性を導き出す。健康を追求するためには、今ある病気を治療するだけではなく、予防の観点から隠れている病気を探し出さなければならない。それによって、健康のための病気探しがクローズアップされてくる。さらに、その運動は生活環境の改善にも向けられることになり、不潔な環境が改善された後も、もつと清潔になることを目指して、ますます小さな不潔が改善の対象として浮かび上がってくる。

(上杉正幸『健康不安の社会学〔改訂版〕』世界思想社、二〇〇八年による。設問の都合により本文の一部を改変している。)

(注1) 瀧澤利行『健康文化論』(大修館書店、一九九八年)による。

(注2) 中川米造『医療の原点』(岩波書店、一九九六年)による。

問一 傍線部①「近代とは異質な健康観」を端的に表現している言葉を、本文中から八字でそのまま抜き出せ。

問二 波線部イ・ロの「予防」の内容を、それぞれ三十五字以内で説明せよ。

問三 A (三箇所) に共通してあてはまる語を、次の選択肢から一つ選べ。

- ア 自然主義      イ 資本主義      ウ 個人主義      エ 進歩主義      オ 科学主義

問四 傍線部②「消去法的思考様式」とは、どのような考えか。説明せよ。

問五 B にあてはまる語を、次の選択肢から一つ選べ。

- ア 直線的      イ 曲線的      ウ 螺旋的らせん      エ 遠心的      オ 比例的

問六 傍線部③「異常の影として健康が存在することになる」とはどういうことか、「影として」が表す内容を明確にして、説明せよ。

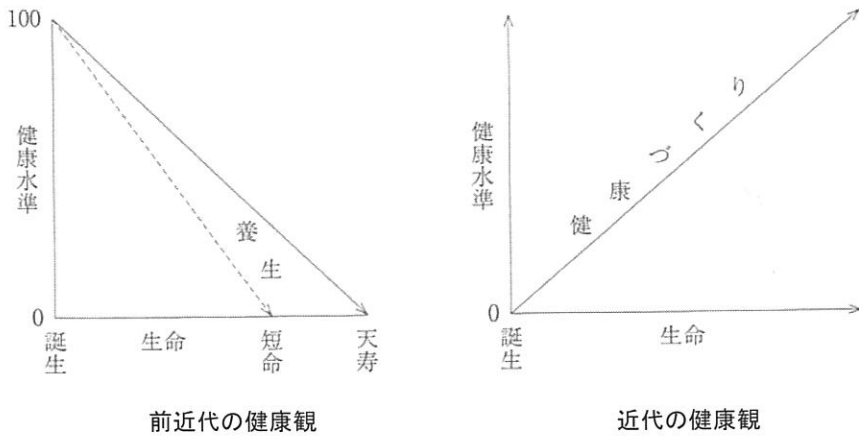


図2 前近代と近代の健康観

問七 筆者は別の箇所で、「前近代と近代の健康観」を、図2のように表している。まず、二つの図の相違点を指摘し、次に、そのような相違が生じる理由を、前近代と近代の健康観を対比しながら、三百字以内で説明せよ。

【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

敦敏あつじの少将の子なり、佐理すけまさの A 大式おほしき、世の手書てかきの上手じょうず。任はてて上のほられけるに、伊予国のまへ a なる泊とどまりにて、日いみじう荒れ、海のおもてあしくて、風おそろしく吹きなどするを、少しなほりて出でむとしたまへば、また同じやうになりぬ。かくのみしつ日頃ひごろ過すぐれば、いと ① あやしく思おぼして、もの問ひたまへば、「神の御崇たたり」とのみ言ふに、 1 さるべきこともなし。

いかなることにかと、怖おそれたまひける夢に見えたまひけるやう、いみじうけだかきさましたる男をとこの (イ) おはして、「この日の荒れて、日頃ここに B 経ねたまふは、おのれがし (ロ) はべることなり。よろづの社やしろに額がくのかかりたるに、おのれがもとにしもなきがあしければ、かけむと思ふに、なべての手して書かせむがわるくはべれば、われに書かせたてまつらむと思ふにより、この折ならではいつかはとて、とどめたてまつりたる b なり」とのたまふに、「たれとか申す」と問ひ (ハ) 申ましたまへば、「この浦の三島にはべる翁おきななり」とのたまふに、夢のうちにもいみじうかしこまり申すと思ふに、 ② おどろきたまひて、またさらにもいはず。

さて、伊予へわたりたまふに、多くの日荒れつる日ともなく、うらうらと c なりて、そなたさまに追風おひかぜ吹きて、飛ぶがごとくまうで着きたまひぬ。湯、たびたび浴あみ、いみじう C 潔斎けつさいして、清まはりて、昼ひの装束まうぞくして、 ③ やがて神の御前みまへにて書きたまふ。神司かみつかさども召し出だして打たせなど、よく法はふのごとくして帰かへりたまふに、 2 つゆ怖おそるることなくて、すゑすゑの船にいたるまで、たひらかに上のほりたまひにき。わがすることを人間にんげんにほめ崇あがむるだに興きようあることにてこそあれ、まして神の御心にさまでほしく思おぼしけむこそ、 3 いかに御心みこころおごりしたまひけむ。また、おほよそこれにぞ、いと日本第一の御手のおぼえはとりたまへりし。 D 六波羅蜜寺むつしの額も、この大式の書きたまへるなり。されば、かの三島みしまの [ア] の額と、この寺のとは同じ御手にはべり。

〔「大鏡」による。設問の都合により本文の一部を改変している。〕

(注) ○大式……大宰大式。大宰府の次官にあたる。○手書……文字を巧みに書く人。○もの問ひ……占うこと。○おのれ……

……この場合、自称の人称代名詞。わたくし。へりくだる気持ちが含まれる。○われ……この場合、対称の人称代名詞。おま

え。○神かみつかさ司……神に仕える人。神官。○法はふ……儀式などの決まりや作法。○六波羅蜜寺……空也の道場がもとになり、のちに天台宗の別院となった寺。

問一 「伊予」は、現在の都道府県で言うと、おおよそどの都道府県か。答えよ。

問二 傍線部 A～D の漢字の読みを答えよ。

問三 傍線部 ①「あやしく」、②「おどろき」、③「やがて」の本文中における意味としてふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えよ。

- |             |        |   |       |   |         |   |          |
|-------------|--------|---|-------|---|---------|---|----------|
| ① 「あやしく」……ア | みすぼらしく | イ | 不思議に  | ウ | じれったく   | エ | めったになく   |
| ② 「おどろき」……ア | びっくりする | イ | 目を覚ます | ウ | おおげさに思う | エ | おびえる     |
| ③ 「やがて」……ア  | 加えて    | イ | 結局    | ウ | すぐさま    | エ | しばらくしてから |

問四 傍線部 a～c の「なり」の文法的説明としてもつとも適当なものを、次の中から選び、記号で答えよ。

- |   |           |   |        |   |        |   |        |   |          |
|---|-----------|---|--------|---|--------|---|--------|---|----------|
| ア | 断定の助動詞    | イ | 伝聞の助動詞 | ウ | 存在の助動詞 | エ | 推定の助動詞 | オ | 形容詞の活用語尾 |
| カ | 形容動詞の活用語尾 | キ | 動詞     |   |        |   |        |   |          |

問五 二重傍線部 (イ)～(ハ) の敬語の種類と、誰から誰への敬意かを、それぞれ次の中から選び、記号で答えよ。なお、答えは重複してもかまわない。

【種類】 a 尊敬語      b 謙讓語      c 丁寧語

【人物】 ア 作者（語り手）      イ 読者（聞き手）      ウ 敦敏      エ 佐理      オ 翁      カ 神司

問六 破線部1「さるべきこともなし」は、どのようなことを意味するか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 神の崇りを受けるはずがないこと。

エ 神の崇りならば死ぬはずであること。

イ 神の崇りが恐ろしくてしかたがないこと。

オ 神の崇りと言うほど大げさなものではないこと。

ウ 神の崇りは迷信にすぎないこと。

問七 破線部2「つゆ怖るることなく」を、例にならつて品詞分解せよ。（用言は活用の種類も答えること。助動詞は意味も答えること。）

(例) か      さ      さ      ぎ      /      の      /      渡           せ      /      る      /      橋      /      に

〔解答〕      名詞      格助詞      動詞・サ行四段      助動詞・存続      名詞      格助詞

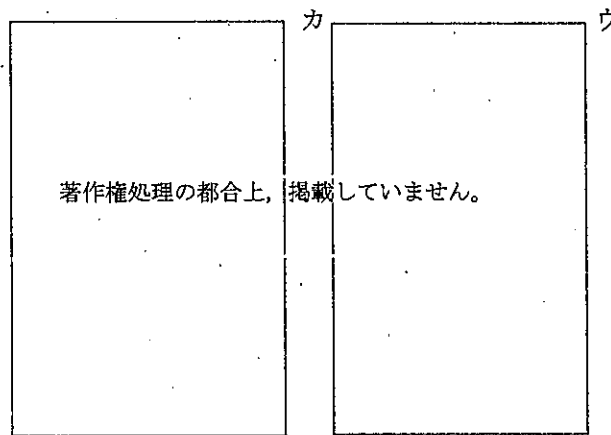
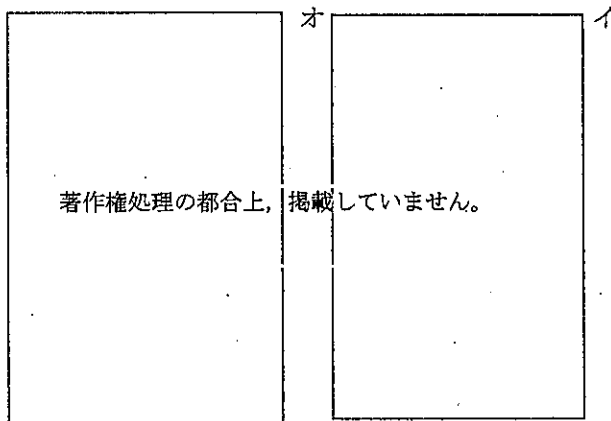
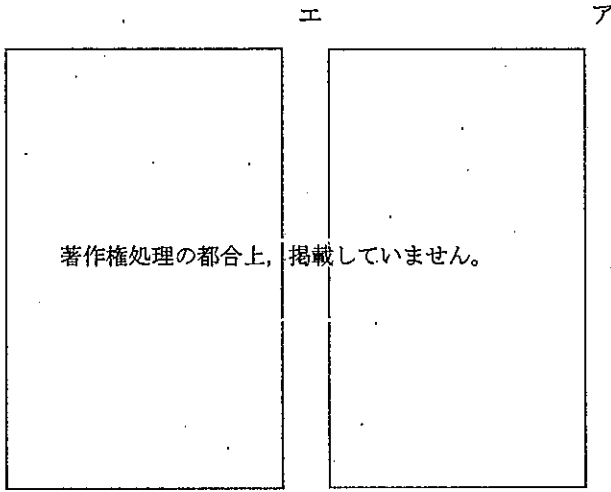
・已然形      ・連体形

問八 ア にふさわしい漢字一字を答えよ。

問九 破線部3「いかに御心おごりしたまひけむ」を現代語訳せよ。

問十 翁が、佐理に額を書くことを頼む理由は二つある。その理由が書かれた部分を二つ、それぞれ二十字以内でそのまま抜き出せ。

問十一 「昼の装束」とは、公事のさいの男子の正式の装束で、束帯のことである。束帯の画像としてふさわしいものを、次の絵の中から選び、記号で答えよ。



(香取良夫『イラストでみる日本史博物館 服飾・生活編 第一巻』柏書房、二〇〇八年による。)

〔四〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

① 大学之法、禁於未發<sup>(a)</sup>之謂予<sup>(b)</sup>、当其可之謂時<sup>(c)</sup>、不<sup>(d)</sup>陵<sup>(e)</sup>節而施之謂孫<sup>(f)</sup>、相觀而善<sup>(g)</sup>之謂摩<sup>(h)</sup>。此四<sup>(b)</sup>者、<sup>(a)</sup>教之所由興也。發<sup>(i)</sup>然後禁<sup>(j)</sup>、則扞格而不勝<sup>(k)</sup>。時過<sup>(l)</sup>然後學<sup>(m)</sup>、則勤苦而難成<sup>(n)</sup>。雜施而不<sup>(o)</sup>孫<sup>(p)</sup>、則壞乱而不修<sup>(q)</sup>。獨學而無<sup>(r)</sup>友<sup>(s)</sup>、則孤陋<sup>(t)</sup>而寡聞<sup>(u)</sup>。燕朋<sup>(v)</sup>逆其師<sup>(w)</sup>、燕<sup>(x)</sup>辟<sup>(y)</sup>廢其學<sup>(z)</sup>。此六者、教之所由廢也。

學者有<sup>(aa)</sup>四<sup>(ab)</sup>失<sup>(ac)</sup>、教<sup>(ad)</sup>者必知<sup>(ae)</sup>之<sup>(af)</sup>。人之學<sup>(ag)</sup>也<sup>(ah)</sup>、或<sup>(ai)</sup>失<sup>(aj)</sup>則多<sup>(ak)</sup>、或<sup>(al)</sup>失<sup>(am)</sup>則寡<sup>(an)</sup>、或<sup>(ao)</sup>失<sup>(ap)</sup>則易<sup>(aq)</sup>、或<sup>(ar)</sup>失<sup>(as)</sup>則止<sup>(at)</sup>。此四者、心之<sup>(au)</sup>莫<sup>(av)</sup>同<sup>(aw)</sup>也。知其心<sup>(ax)</sup>、然後<sup>(ay)</sup>能<sup>(az)</sup>救<sup>(ba)</sup>其失<sup>(bb)</sup>也。教也者、長<sup>(bc)</sup>善<sup>(bd)</sup>而救<sup>(be)</sup>其失<sup>(bf)</sup>者也。

善歌者<sup>(c)</sup>、使人繼其聲<sup>(d)</sup>。善教者<sup>(e)</sup>、<sup>(f)</sup>使人繼其志<sup>(g)</sup>。其言也約<sup>(h)</sup>而達<sup>(i)</sup>、微<sup>(j)</sup>而臧<sup>(k)</sup>、罕<sup>(l)</sup>譬<sup>(m)</sup>而喻<sup>(n)</sup>、可謂繼志<sup>(o)</sup>矣<sup>(p)</sup>。



凡<sup>ソ</sup>学<sup>ノ</sup>之道<sup>ハ</sup>、嚴<sup>ニスル</sup>師<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>難<sup>シ</sup>。師<sup>ニシテ</sup>嚴<sup>ル</sup>然後<sup>ク</sup>道<sup>ヲ</sup>尊<sup>クシテ</sup>、道<sup>ヲ</sup>尊<sup>ル</sup>然後<sup>ク</sup>民<sup>ヲ</sup>知<sup>ラ</sup>敬<sup>レ</sup>学<sup>ヲ</sup>。是<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>君<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>臣<sup>ニ</sup>於<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>臣<sup>者</sup>二、当<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>為<sup>レ</sup>尸<sup>ト</sup>、則<sup>チ</sup>弗<sup>ハ</sup>臣<sup>也</sup>、当<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>為<sup>レ</sup>師<sup>ト</sup>、則<sup>チ</sup>弗<sup>ハ</sup>臣<sup>也</sup>。大<sup>ノ</sup>学<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>礼<sup>、</sup>雖<sup>ツケト</sup>詔<sup>ニ</sup>於<sup>リ</sup>天<sup>ノ</sup>子<sup>、</sup>無<sup>ク</sup>北<sup>ニ</sup>面<sup>。所<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>尊<sup>ブ</sup>師<sup>也</sup>。</sup>

善<sup>ク</sup>学<sup>ブ</sup>者<sup>ハ</sup>、師<sup>ニシテ</sup>逸<sup>シテ</sup>而<sup>シ</sup>功<sup>シ</sup>倍<sup>シ</sup>、又<sup>ヒ</sup>從<sup>ヒテ</sup>而<sup>シ</sup>庸<sup>ラ</sup>之<sup>。不<sup>ク</sup>善<sup>ク</sup>学<sup>ブ</sup>者<sup>ハ</sup>、師<sup>ニシテ</sup>勤<sup>シテ</sup>而<sup>シ</sup>功<sup>ナリ</sup>半<sup>シ</sup>、又<sup>ヒ</sup>從<sup>ヒテ</sup>而<sup>シ</sup>怨<sup>ム</sup>之<sup>。</sup></sup>

〔『礼記』学記より。設問の都合により、返り点・送り仮名を省略している部分がある。〕

(注)

- 大学……天子・諸侯が先王の道を習わせるために設けた教育機関。
- 未発……情欲がまだ生じていない状態の年齢を言う。 ○其可……ここでは学ぶ基礎ができていて、成人の時を言う。
- 陵節……年齢に応じた程度を超える。 ○孫……ここでは「順」の意味。
- 相觀而善……よくできる者が先生と問答し、他の者はその問答を見て理解する。
- 摩……切磋すること。 ○扞格……抵抗が強く、教える内容が入っていかないさま。
- 雜施……教える内容の順序が乱雑である。 ○燕……ふざける。
- 辟……「譬」に同じ。先生が教えるために用いる比喩。 ○失則多……以下、四つの則は、「於」と同じ。
- 臧……善。 ○罕……少。 ○尸……祭祀の際に死者に代わって祭りを受ける者。
- 北面……北に向かって対面する。天子は南に向かって対面した。 ○庸……努力したと考える。

問一 傍線部(a)～(d)のうち、書き下し文で読まないものがひとつある。それはどれか、記号を答えよ。

問二 傍線部(イ)～(三)の読み方を、送り仮名も含めひらがなで書け(現代仮名遣いでもよい)。

問三 傍線部(あ)(い)(う)の書き下し文を書き(現代仮名遣いでもよい)、現代語訳せよ。ただし、(い)(う)については、「其」の内容を明らかにして現代語訳すること。

問四 傍線部①「大学之法」について、その内容から類推して、誤った教育方法と考えられるものを次から一つ選べ。

- ア 年齢に適した内容を教え、その年齢に対して多すぎる内容を与えないようにする。
- イ 成人した者には、時機を逃さず、その時にふさわしい内容を教えて、学ばせる。
- ウ 自分自身で取り組ませるのみならず、他の学習者と先生との問答からも学ばせる。
- エ 学習を妨げる様々な欲求が目立った際には、その都度禁止して態度を引き締める。

問五 傍線部②「四失」について、その内容をまとめよ。

問六 傍線部③「無北面」について、次の問いに答えよ。

- (1) 通常は誰と誰がどのように対面するのか、説明せよ。
- (2) 大学の礼として、どのような人に対しては「無北面」とするのか、説明せよ。
- (3) 「無北面」とすることが何を表すのか、説明せよ。